

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

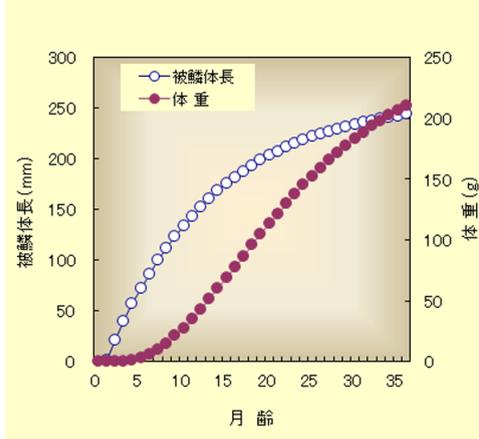
系群名 対馬暖流系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 3年
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 九州周辺水域では周年、日本海北部では春～夏
索餌期・索餌場: 夏～秋季、日本海西部～東シナ海
食性: 稚魚期・成魚期ともカイアシ類、十脚類、端脚類
捕食者: 大型魚類やほ乳類、海鳥類、頭足類

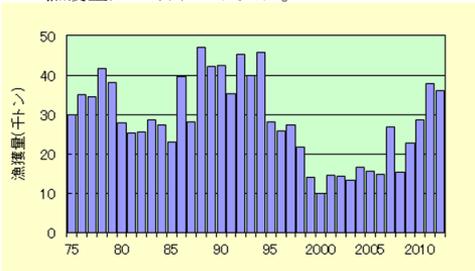


漁業の特徴

ウルメイワシ対馬暖流系群は、東シナ海区(福岡県～鹿児島県)では中小型まき網や棒受網により、日本海西区(福井県～山口県)では大中型まき網、中型まき網、定置網などにより漁獲され、日本海北区(石川県・富山県)では定置網などで混獲される程度である。漁獲が多いのは、東シナ海区と日本海西区である。なお、対馬暖流域では、沿岸での釣りや刺網による漁獲はほとんど行われていない。

漁獲の動向

東シナ海区において漁獲量は1981～1997年には0.7万～1.6万トンであったが、2000年にかけて減少した。2001年以降は増加に転じ、2012年は2.6万トンであった。日本海西区において漁獲量は1980年代後半～1990年代前半に多く、2001年以降の漁獲量は0.6万～1.2万トンで推移している。日本海北区においてはあまり漁獲されず、2012年の漁獲量は0.1万トンであった。

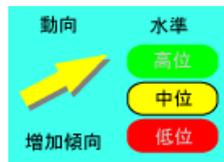


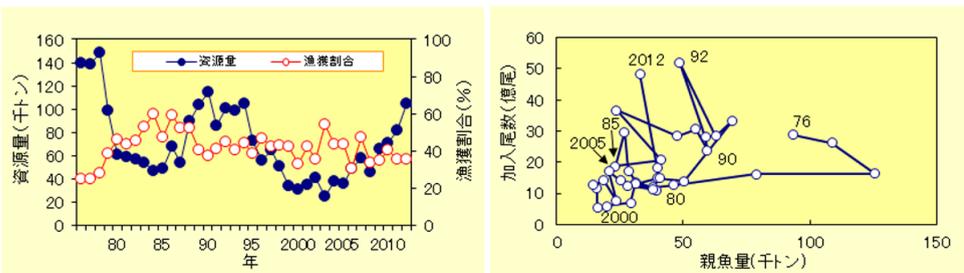
資源評価法

月別漁獲量と体長測定資料を用いたコホート解析により資源評価を行った。

資源状態

資源量は1970年代後半～1980年代前半に減少、1980年代後半～1990年代前半に増加、その後再び2000年にかけて減少した。2001年以降は変動しながらも徐々に増加し、2012年には10.5万トンと推定された。これより、資源動向は増加と判断した。親魚量と加入尾数には正の相関があったが、親魚量が多くなると加入尾数は頭打ちになる傾向が認められた。2012年の親魚量は3.3万トンでBlimitを上回ったが、加入尾数が頭打ちとなる親魚量7.5万トンを下回ったことより、資源水準を中位と判断した。





管理方策

資源管理の基準となるBlimitは、加入量の上位10%を示す直線と、再生産成功率の上位10%を示す直線の交点に近い1984年の親魚量2.7万トンとした。2012年の親魚量は3.3万トンでBlimitを上回った。2013年以降のRPSを近年5年間の中央値で与え、それに対応するFmedで漁獲すると、2014年以降の資源量は2012年よりもやや減少する。ABClimitはFが基準値(Fmed)で、RPSが近年5年間の中央値で推移するとした時に計算される漁獲量とした。予防的措置としてABCtargetは0.8Fmedとした。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	65千トン	Fmed	1.26	46%
ABCtarget	58千トン	0.8Fmed	1.01	41%

- Fは各年齢の平均

資源評価のまとめ

- コホート解析により資源量を推定した
- 資源水準は中位、動向は増加
- 2012年の親魚量は3.3万トンで、Blimit(2.7万トン)を上回っている

管理方策のまとめ

- 近年のRPS中央値に対応するFmed以下で漁獲し、親魚量の維持を図ることが適当
- 資源を安定して利用するためには、親魚量の確保が有効

執筆者: 福若雅章・大下誠二・安田十也

資源評価は毎年更新されます。